

これからの研究課題

東京学芸大学大学院連合学校教育研究科学校教育学専攻
元笑予

近年、子どもの中のいじめで、パソコンや携帯電話等が使われることは珍しくない。一方、いじめを受けた子どもがツイッターやLINE上でつぶやいたSOSが「放置」され、自殺という最悪の事態に至ってしまうこともある。2017年11月17日NHKのニュースによって、子どものいじめや自殺などの相談にSNSのLINEを使ったところ、電話よりも相談件数が増えたことがわかった。「ネット上のいじめ」とは、携帯電話やパソコンを通じて、インターネット上のウェブサイトの掲示板などに、特定の子どもへの悪口や誹謗・中傷を書き込んだり、メールを送ったりするなどの方法により、いじめを行うものを意味する。杉原（京都大学）は「SNSは若者にとっていちばん身近なので、相談に活用できるように対応することが必要だ」と話している（NHK, 2017）。いじめの防止につなげようと、千葉市の市立中学校は2016年度から子どもたちが毎日持ち歩く生徒手帳に、いじめに遭ったり目撃したりしたときの対応や相談窓口を記載する取り組みを始めた（NHK, 2016）。ネットいじめを低減する重要な要因、解消のために必要な要因は何であると考えられるのだろうか。この点を明らかにすることが喫緊の課題である。

中国では、2017年に国家教育部がはじめて「いじめ」の定義を明確に示したが、その後の対策はまだはっきりとしていない。中国でいじめ問題に人々の重大な関心が寄せられるようになったのは、ごく最近のことにすぎない。長い間、多くの中国人は子どもの中のいじめは免れられないことであると考えていた。一学年に250名くらいの児童・生徒が在籍しているとの報告があり、生徒数が多いことが影響していると考えられる。いじめが起こる場面では傍観者が最も多い。傍観者の多くは、いじめをする人が悪いと思い、いじめられている人はかわいそうな人であると思っているが、どうしたら良いかわからないという状態にある。多くの児童・生徒は、学校側からいじめについて認識を尋ねられた場合、知りうるすべての真実を学校側に伝えるという意見で一致している。したがって、いじめを傍観している児童・生徒は、いじめを解決する上で鍵となる人物である。いじめが先進国ほど表面化していない中国において、学級づくりでは多くの傍観者を取り込んで、良い雰囲気構築することが極めて重要なことであり、いじめを減らす有効な方法になると考えられる。

良い雰囲気の学級を作ることはいじめの予防教育につながる。栗原（2007）は、いじめの早期発見と早期対応を促す教師のあり方として、教師が子どもに信頼されることと共に、教師の意識を変えることが必要であると指摘している。すなわち、いじめがないことを前提に児童・生徒たちに接するのではなく、いじめが存在する可能性を前提に接することで、早期に的確な対応を取ることが可能となる。したがって、教師の課題は、いじめをどのように把握するか、教室全体がいじめ防止・抑止に結び付く雰囲気をどのように作り出すかという点になるといえる。